

山内昌之 編著  
細谷雄一

# 日本近現代史講義

成功と失敗の歴史に学ぶ

## 基本が 身につく 14 講

明治維新、  
日清・日露戦争、  
第二次世界大戦、  
東京裁判と歴史認識問題……

強力執筆陣  
が集結!

中公新書 2554  
定価 本体900円(税別)

序章 令和から見た日本近現代史

——「ロドトスの「悪意」から劉知幾の「公平」へ

山内昌之

変化の構造——歴史と時間

「ああ、不幸なことは幸運なことよりも、なんとたやすく世間の耳に届くことか」とは、プルタルコスを紹介する詩句断片である（『モラリア』第六巻、戸塚七郎訳、京都大学学術出版会、二〇〇〇年）。

二〇一五年は、第二次世界大戦の終結、つまり日本の敗戦から七〇年にあたっていた。七〇年という数字は、歴史を見る上でことさらに意味があるわけではない。他方、二〇一八年は、第一次世界大戦の終結から一〇〇年に相当する。二つの大戦を日本人にとって不幸と幸運に二分するつもりはないにせよ、日本人にとって第一次世界大戦はあまりにも知識がおぼろげな反面、第二次世界大戦の敗戦経験は誰もが忘却できない重みを持っている。

歴史の基礎的な素材は時間であり、時間を歴史で問題にするときは、二つの「進歩」という性格が緊密に結びついている。日本の敗戦という史実は、イエスの生誕やイスラームのヒジュラ暦元年といった時間のように、政治外交や社会文化で起きた流れの中で意味を求める年代記的な出発点を確定する場合に不可欠となる。また、七〇年や一〇〇年という数字は、フランスの歴史家ジャック・ル・ゴフが二四時間から成る一日、一〇〇年から成る世紀を「時間の区分」（時間の計測可能な単位）と呼んだひそみにならうなら『歴史と記憶』新装版、立川孝一訳、法政大学出版局、二〇一一年）、歴史の流れを前向きに「幅」や「束」として象徴的に捉える場合に意味をもつだろう。

戦後七〇年や戦後一〇〇年という「時間の区分」は、もともと歴史に潜む時間を「進歩」の文脈で捉える場合に、ますます有効になる。歴史における「時間」の流れは、人びとの記憶だけでなく、その時代に特有であるか、何らかの意味で優勢な世界観や「歴史認識」と結びつきがちだからだ。その点で言えば、二つの大戦から七〇年や一〇〇年経った時間の区切りは、内外に負の遺産や記憶を残した大日本帝国の崩壊と結びつくとともに、大正デモクラシーで挫折した平和主義や国際協調主義を新たな日本国の出発によって蘇生・発展させた「時間の区分」を異なった意味で表現しているのだ。

世界史に目を転じれば、二〇一五年は第一次世界大戦中のトルコ人（オスマン帝国）によ